



TITLE:

「月に叫ぶ者」

AUTHOR(S):

山本, 一清

CITATION:

山本, 一清. 「月に叫ぶ者」. 天界 1924, 4(44): 309-310

ISSUE DATE:

1924-08-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/160159>

RIGHT:

「月に叫ぶ者」

山本 一 清 譯

「貴女のジュエルを御掲げなさい。そして片眼を閉ちて……」

街路の歩道に望遠鏡を立てゝゐる此の男は、宇宙の不思議を人々に覗かせる魔術師といった風に威厳振つて、今し方、めがねに眼を當てやうとする一人の婦人に怒う言つた。しかし心の中には或る悲哀がある——彼れとしては、人々に土星と其の輪とか、或は詩人の喜びさうな宵の明星とかを見せたいのだけれど、民衆は皆

「月をく」

とせがむのである。望遠鏡の主人は、（見たところ）可なり物知りらしく、齡も相當にまつてゐる——かうした人々の願ひを

「子供見たいな！」

と押へて、取り合ふとはしない。しかし、やはり、此の月を見せて、彼れは其の日く／＼のバンミバターミを獲なければならぬのだ。時たまには、神の與へのやうに新しい彗星が見えて來ることもあるのだけれど。

「さいつも、こいつも、皆同じだ。いつも月ばかり見たがる代ものだ。いやはや、今まで、何年か前から、ずつと何時

もそれたつた」

と、つぶやきつゝ、こんどは急に婦人に向つて、

「觸つては、いけませんよ。奥さん。がや／＼騒いでは見えません。ちよいとジュエルを御掲げ、そして片眼を閉ちて」

彼れは、いかにも天のここには慣れたものだと言つた風の學者振りを、親切の中にも混ぜて、手眞似でやつて見せる。

「今別に誰が觸つたのでなくても、何かの原因で小さな振動があれば、もう其れで全く駄目なのだから。地下鐵道ですあれが、いけないんです。以前には、あんなものが無くて、好かつたのだが……」

全く。ユニオン廣場が町の真中であつた時分の古い馬車馬のコック／＼いふ足音を彼れは思ひ出してゐるのである。

「エ、まだ大丈夫ですか？」

まるで、星の世界と世界とが衝突でもするのでないかと言つやうな心配ぶり!!

彼れの鬚は白い。そして、此の小さな公園のあたり、よく本にでも書いてあるやうな、何か、大自然の靜寂さが彼の身を取りまいてゐるやうでもある。彼れはハドソンの繪のやうに、或る古い智識を暗示してゐる。しかし其の得意の顔付の中に、いつも或る悲哀があり、又、兩眼は忍耐を示してゐる。

「今見たいな寒さの時は、人々が立止まらない。」

こつぶやきつゝも、彼れは寒い冬の方が空が澄んで好いのだ
 と説明するに、結果は却つて反對に、人々は家の中の暖爐を慕
 つて往つて了う。オー、ねぢけた無智の人間たちよ。望遠鏡
 の主は眞の美を人に見せて、わづかの壹錢貳錢を漸くもうけ
 てゐるのだ。若し茲に或る技師のアインシュタインが現はれて、
 彼れに、月の裏側を見せるやうな器械でも呉れやうものなら
 其の時こそ彼れ老人も一躍して大金持ちになるのだらうに。
 彼れは、星を人に見せるが、其の星の意味が彼れには讀め
 るのだらうか？」さて、いよく「と言ふ場合には彼れは黙り
 込む。沈黙は蓋し偉大な讚美なのだ。そして一人の少女が
 「御星様は何なのでせう？」
 中でも聞く場合にも、

「あなのヴェールをめくつて、片眼を御閉ぢなさい」
 彼れは恚う應へるばかり。

チツミばかりの科學者、哲學者、美の嘆美者、欺善者こそ
 一つにしたやうで、手には、淡雲りの晩に使ふための安物眼
 鏡を持ち、満月の夜なごには子供の持つローラー、江りの上に
 大きい望遠鏡を載せて歩く。彼れは高く澄まして、打ち沈
 んではゐるが、そのくせ可なり人間臭くもある。夏になれば
 そしらぬ風で、三四里向ふの海岸にある海水浴場へ出かけて
 行き、眼鏡で、星ではなく、遠方の水泳ぎ者を人に見せる。
 かうして冬の費用の不足以上を儲けるのである。まつたくの

實際學者に違ひない。(——或る切りぬきより。山本)

月の歌

荒木生

波もなき海邊の砂にわが居れば空黄ばみて春の月出づ

(若山牧水)

水よりも冷たき色をまこひつゝ月は靜かに秋になりけり

(武山英子)

月光は杳かに路をてらしけりひこり愁ひていづこにか行く

(金子薫園)

あめつちに我悲しみ月光をあまねき秋の夜になりけり

(石川啄不)

月のさす草の傾斜も蟲の音も茫漠としてはてしも知らず

(尾山篤三郎)

谷底上ればひたし眼にせまる黒き山尾に沈む月かも

(中村憲吉)

燈臺の光が徐々まはるなり月しつやかに落ちそむるころ

(岩谷莫哀)

十餘人縁にならびて春の月八坂の塔のひさし離るこ

(與謝野晶子)